



TITLE:

<図書紹介>津田元一郎, 『アジアにおける教育の基本問題』, 民主教育協会, 東京, 1965, 81p

AUTHOR(S):

高木, 太郎

CITATION:

高木, 太郎. <図書紹介>津田元一郎, 『アジアにおける教育の基本問題』, 民主教育協会, 東京, 1965, 81p. 東南アジア研究 1966, 3(5): 172-173

ISSUE DATE:

1966-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55160>

RIGHT:

のため成果があがっていないこと、仏教教育が行なわれていること、少数民族の教育問題があることなどが述べられている。タイは唯一の独立国として、教育制度は比較的整備されているはずであるが、問題は多い。浪費の問題は東南アジアの多くの国に見られる問題である。教育不足、職業教育、大学教育、文盲根絶等の問題をもかかえている。ラオスは東南アジアのうち教育面では最もおくれており、かつ政情不安定である。カンボジアは小国であるが、比較的平静であった。しかし文盲と人口増に悩んでいる。旧宗主国フランスの影響はなお強い。ベトナムは多年の動乱に悩まされていることは同情にたえない。教育も制度は整っているが、義務教育はわずか3年であり、教育条件もわるい。マレーシアは3民族から成る複合国家として教育用語などに困難な問題をかかえている。この国ではイスラム教による宗教教育が行なわれている。文盲の悩みは大きい。シンガポールは最近独立した東南アジア最小の国であり、マレーシアと同じ教育用語の問題を持っている。インドネシアは東南アジア最大の国であり、教育に大きな期待をかけているが、教育制度はきわめて複雑である。中等教育、職業教育、高等教育、教員養成等の拡充計画がすすめられているが、施設の不備、教育条件の劣悪などの問題がある。フィリピンはスペイン、アメリカの影響を精神面で強く受けている。教育は普及しているが、浪費、文盲などの問題がある。中央教育行政に委員会制度をとっている点に特色がある。

以上東南アジア各国の教育制度の共通点として、義務無償教育の制度化、教育行政機構の整備、公教育費への努力が見られるが、教育の実際はそれに伴っていない。先進国の模倣に急であって、新興国家としての必要に即応していない。職業教育、科学教育、体育も軽視されている。教育の悪条件、浪費も共通の難問題であると指摘している。

第3部では、東南アジアの国々が大きな教育要求を持って、その実現に努力しているにもかかわらず、それには多くの技術と経費とを必要とするところから、自力のみでは解決できないので外部からの援助や協力が必要である。そのためにユネスコも努力しているが、アメリカの援助に比べて、日本は何をしているか、地理的にも近く、互いに親近感も強いわが国が積極的に援助や協力の手をさしのべることは、わが国に

課された道義的責任であると訴える著者に強い共感を禁じ得ない。
(高木太郎)

津田元一郎『アジアにおける教育の基本問題』、民主教育協会、東京、1965、81p.

アジアの教育を理解するには、西欧的視点からでなく、アジア的視点から見なければならぬ。教育の普及がアジア開発の至上命令であるとしても、産業の発達、生活の水準、人口増加、植民地主義の残存等アジア特有の社会構造に即応して考えなければならないというのが著者の立場である。本書は、文盲の問題、初等教育、中等・高等教育、アジアの教育の諸問題の4章から成っている小冊子であるが、著者の直接の見聞と多くの資料によって、アジアの教育問題をその底に横たわる社会構造との関連において科学的に分析した学問的にも価値ある好著である。

第1章では、世界人口の半ば以上を占めるアジアにおいて、文盲率がアフリカに次いで高いのは問題であるとして、国ごとに性別、年令別、人種別、宗教別に分析し、教育の普及や経済発展と文盲解消との関係を論じている。

第2章では普及の現状、インドとタイの初等教育、教育浪費の問題を取り上げている。第1の問題では、全人口に占める就学者の比率をもって教育普及の指標とすることの危険性を述べ、カラチ・プランの誤りを指摘している。第2の問題では資料の関係上インドとタイに限定し、就学率の伸びをわが国と比較し、数十年のおくれを指摘している。第3の問題では、教育のおくれた社会の特質としての遅滞や脱落の問題をとり上げ、小学校を卒業するものは、日本、台湾、韓国を除き半数以下に減ずることを指摘し、その原因を追求している。アジアの初等教育普及計画は、それぞれの国の地理的・歴史的・社会的条件の検討の上に立てられなければならないというのが著者の見解である。

第3章では、中等・高等教育拡充の急務、試験制度の問題をとり上げている。カラチ・プランは人権宣言の立場から人間の権利として初等教育の普及をとり上げたが、OECDやECAFEに見られる教育投資論からは、アジアの経済開発のためには、中等教育の拡充こそ先決であると主張する。技術革進の時代に加速的に近代化を達成しなければならないアジア諸国では、未熟練労働力よりも近代技術をにっていけるマン・パ

ワーを要求している。産業構造からいっても、中等・高等・初等教育の順に拡充が必要だとする。そのために障害となるのは、アジアに伝統的な進学と進級・卒業のためのきびしい試験制度だとして、選別制度とカリキュラムの改善の必要を述べている。

第4章では、女子教育、教員問題、海外留学の問題をとり上げている。第1の問題では、アジア特有の問題である教育上における男女の差別の原因は、社会階層の分裂にあるとしている。高等教育への女子の進出は必ずしも低くはないが、それは上流階級の女子に限られている。一般女子の就学率の低さは宗教の影響にもよる。アジアの教育は経済的・社会的・文化的要因を抜きにして考えられない。アジアの教育によって、教員養成の拡充ほど緊急な課題はない。人材養成を海外に依存することも問題であるが、アメリカの影響力の増大は無視できないとしている。（高木太郎）

Hydrology Section, Survey Division, Royal Thai Irrigation Department : *Hydrology and Water Studies of the LAMTAKONG*. Bangkok, 1962.

LAMTAKONG Project は、バンコックから約 100 km の地点で、コラート寄りに存在する灌漑と洪水調節を対象とした水利計画である。この地方の流出量は各年により非常に変動が大で、143~239 mil. cu. m と変化し、年間流出量の 90% は雨期に流出している。灌漑を行なうためには、どうしても年間流量の調節を行なう必要がある。全灌漑受益面積は 238,000 rai (6.5rai = 1 ha)、灌漑に必要な最大用水量は 18c. m. s で 8 月に生じる。この年間の流量調節のために、有効貯水量 220 mil. cu. m が必要である。したがって洪水調節に対しては、その全流出量が貯水されることとなり、洪水時余水として放流するものは大した量とはならない。

貯水池内の堆砂量については、20 mil. cu. m を 100 年間に見込んでいる。

したがって総貯水量は 240 mil. cu. m となる。余水吐の設計に対しては、流入計画洪水量は最大確率洪水として 1,500 c. m. s を考え、余水吐巾は 40 m とし、計画流出余水吐量は 625 c. m. s となっている。この洪水越流のための余裕水深は 4.20 m とし、結局 2 m の free-board を考えて、ダム堤頂標高は +281.00m

となる。なお、灌漑期の取水能力は 20 c. m. s である。

本計画書は、Royal Irrigation Department によって作成されたもので、モンsoon地帯の水利計画の考え方に対して、一つの有用な資料と思われる。なお、筆者らは、本 Project の水文資料について今後継続研究していく予定であり、ここに紹介した。

本計画書は1962年に完成しているが、現在漸く、事業の実施が始まったところである。（南 勲）

J. Marvin Brown : *From Ancient Thai to Modern Dialects*. Social Science Association Press of Thailand, Bangkok, 1965, ix+180 p.

タイ系諸言語の比較言語学的研究はかなり古くから行われており、その文献もチベット・ビルマ系の言語に関するものより多いであろう。本書は、それらのうちで最も新しいものと言ってよいだろう。「新しい」と言うのは、ただ時間的に新しいと言うだけではなく、そこに用いられている方法論に関しても言えることであって、これが最も重要な点である。すなわち、東南アジアの言語に関する将来の比較研究と言うのは、同系統ではなかろうかと思われる言語から単語をひろい集めて、似た様な形のものをつき合わせるに過ぎないという傾向が、多少ともあった。これに対して、本書では、ただ似た単語のつき合わせと言うのではなく、整然とした理論に基づいていると言える。本書が1962年に Cornell 大学に提出された doctoral dissertation である点から現在のアメリカにおける東南アジアの言語の比較研究の動向あるいは水準をある程度しめすものと見てよいだろう。

著者は、1953年に初めてタイ国に来て以来のべ10年間を現地ですごしており、現在はバンコックにある American University Alumni の Staff Linguists の 1 人である。単にこの地域の言語を取りあげて研究すると言うだけではなく、一般的な言語理論をも研究しており、自分の展開した理論を具体的な言語の研究に応用していると言える。しかし、今までに発表した論文・書物の類は、本書以外にはほとんどなく、私の知る限りでは、University of Fine Arts の Journal に発表された論文が 1 つあるだけである。この論文は、現在バンコック平野を中心として話されているタイ国中部方言は、Ram Khamhaeng 王碑文に代表される